

## 測定機器の改善

騒音測定に使用する騒音計の機能は、航空機騒音に係る環境基準が策定された当時から現在に至るまでの30年程度において、飛躍的に進歩している。

航空機騒音に係る環境基準が策定された1970年代後半、現場の騒音計測器として使用されていたのは等間隔目盛りの指示計であり、騒音計の示す騒音レベル瞬時値を測定者が記録するものであった。1980年代になると、等価騒音レベルを求めるのに必要な機能が加えられ、1990年代になると、数値表示の騒音計が開発され、現在の形態の騒音計が確立された。演算機能においても、1990年代になると周波数補正特性、実効値演算、等価騒音レベル演算をすべてデジタル処理で実現できるようになった。近年では、騒音計にメモリ機能が付与された騒音計が開発され、長時間連続の自動測定に耐えうる大量の測定データの記録が可能となり、また等価騒音レベルの算出が騒音計内部で実現できるようになり、長時間の等価騒音レベルの測定が可能となった。また、モニター音録音機能（実音モニター）が搭載され、オフラインでの騒音レベル演算における除外音処理が可能となった。